特集

がんばれ！北海道

開拓の群像特集

合田 一道

歴史から見えるもの㉙

故郷を偲び、白虎隊の墓碑建立

檜山管内せたな町北檜山区丹羽の玉川公園に「白虎隊の墓」が立っているのをご存知ですか。これを立てたのは旧会津藩の白虎隊士だった丹羽（にわ）五郎という人です。五郎はこの地に入植し、ここを故郷に見立てて、開拓にいそしんだのです。

丹羽 五郎

慶応四年（一八六六）、戊辰戦争が起こり、新政府軍は会津藩を朝敵とみなし、領内に迫ってきました。十七歳の五郎は白虎隊士でしたが、丹羽宗家を継いだため、鶴ヶ城内の藩主松平容保の側に仕える身となります。

八月二十二日、五郎は藩主の供をして、城下の滝沢村まで出撃しました。白虎隊士中二番隊も一緒でした。ここで白虎隊に対し、戸ノ口原へ出陣の命が下り、隊士らは勇躍出立しました。これが五郎との最期の別れとなります。

翌日、戦闘になり、散り散りになって飯盛山まで逃れた隊士ら十九人は、遙か鶴ヶ城を望み、自決していきました。五郎は大事な友を失い、自分だけが城にいて生き延びたことに後ろめたさを覚えました。

一カ月に及ぶ籠城戦の末に、会津藩は降伏し、〝流罪〟同様に下北半島に移されます。五郎は藩を離れ、身分を隠して東京府の警察官になります。明治十年（一八七七）、西南戦争が起こると、警視庁抜刀隊の小隊長として出撃し、宿敵である薩摩の西郷隆盛軍と交戦、勝利を収めました。友だちの仇を討った気がしました。

五郎はその後、栄進を続け、明治二十一年（一八八八）、東京・神田和泉橋警察署長になります。神道を敬う五郎は、ここで北海道開拓に尽くし、自らの力で新しい〝神の国〟を作りたいと考えたのです。すぐ北海道を訪ねて瀬棚郡の「利別原野植民趣意書」を作成し、貸付願書を道庁に提出、許可されます。

明治二十五年（一八九二）春、五郎は福島県民ら移民十二戸四十九人とともに故郷を出発し、瀬棚村の利別原野に入植し、開墾に励みました。開拓は苦難の連続でしたが、以後、五年間にわたり入植者が続き、戸数二百七戸、人口千百二十八人、開墾地は二千二百ヘクタールになりました。

この間、五郎は道路を作り、学校や郵便局、病院、神社を建て、水田に水を引く溜め池を作り、養蚕組合を設けるなどして、立派な集落が誕生したのです。人々はこの地を、五郎の姓を取り、丹羽村と呼びました。

五郎は集落の背後にそびえる小金山が故郷の飯盛山に似ているところから、この山麓一帯を晩翠園（現玉川公園）と名付け、大正十三年（一九二四）、小高い大悟山の頂上に念願だった「殉難白虎隊士二九人」の墓碑を建立し、ここを玉川遙拝所としたのです。

長く連なる壁面に、陶板で作られた墓碑を一つ、一つ埋め込んだ特徴のあるもので、碑面には隊士の氏名を「津田捨蔵君」というように君付けで、年齢とともに記されています。その脇に文字を書いた人の名が添えられています。

五郎にはもう一つ、果たさねばならない念願がありました。警視庁抜刀隊として西南戦争を戦い、戦死した部下三十三人の慰霊でした。四年後、五郎は白虎隊墓碑の近くに、戦死者の数にちなんで三十三観音を建立したのです。

ここに立つと、維新期を生きた男の熱い心情を感じます。

「殉難白虎隊士一九人」の墓碑

◆プロフィール◆

昭和九年（一九三四）、空知郡上砂川町生まれ。北海道新聞に入社し、道内各地を回る。在職中からノンフィクション作品を発表。『定山坊行方不明の謎』で北海道ノンフィクション大賞を受賞。退職後は札幌大学文化学部講師。著書は『日本史の現場検証』『人間登場～北の歴史を彩る』『大君の刀』など。